



中西 準子

なかにし・じゅんこ  
学博士。横浜国立大学名誉  
教授。環境リスク評価。文  
化功労者。76歳。

「2011年くらい福島第一原子力発電所の事故による健康影響について調べてきた。そのことを2回にわたって書きたい。当初は、熊本の人に福島の話は縁遠いと思ってしたが、福島の問題には、地域を問わず普遍的なことが多い上に、遠い所には事故直後の情報しか伝わっていないために誤解が多いことに気付いた。事故直後には、状況が分からないままの情報が流れる。やがて事情が明らかになるが、そういう新しい知見は、地元には伝わるが、他の地域には伝わらない、報道されないものだ。事故当時の情報は、チェルノブイ

リ以上のひどい被害だということだった。したがって多くの人が、今でもそう思っているのではなからうか。だから、福島は、チェルノブイリとどこが違うかを書かねばならないと考えた。

原子力発電所からの排出物の中のストロンチウム90やプルトニウム239は福島では非常に少ない。まず、ここが違う。揮発性の元素で問題になるのは、ヨウ素131とセシウム134と同137であるが、チェルノブイリとの比は、それぞれ11・3分の1、2・4分の1、5・7分の1である。総じて空間線量率はほぼ

10分の1、汚染された面積も大まかに10分の1である。

放射性物質で汚染された環境に住んだ場合、四つの経路から放射線の影響を受ける。①食べ物や水の摂取 ②空中の粒子状物質の吸引 ③皮膚への接触 ④土壌など汚染された物体や空中浮遊物質からの照射である。最初の二つは放射性物質が体内に入

## 福島原発の事実 冷静に評価を

り、内部被ばくと呼ばれている。三番目の奇号は小さいので無視するが、四番目が外部被ばくである。これは、土などに吸着した放射性物質が放出する放射線による被ばくで、放射性物質そのものは人体には入らない。

水俣病、イタイイタイ病、四日市ぜんそくなど、ほとんどの公害事件は内部暴露によるものであったた

め、日本人は内部被ばくについては敏感である。またチェルノブイリでも、外部被ばくは比内部被ばくが大きかったため、現地を訪れた人は、帰国すると「内部被ばくが危ない」を繰り返す。しかし、福島の場合、外部被ばくの大きさは無視できないが、セシウムによる内部被ばくは実に小さい。この事実を伝えた時、ベ

ラルーシやウクライナの専門家は、日本人は嘘をついていると言ったそうである。それくらい内部被ばく信仰は外国でも強かった。

内部被ばく量を推定できる結果は数多くだされているが、その中の一つ、福島県民健康調査のホールボディカウンターによる計測では、昨年未だに24万人の結果がでている。うち事故直後に近い時期の調査

である、2012年1月までの15384人の結果を見ても、1以上3mSv(ミリシーベルト)未満の人が25人で、残りは1ミリシーベルト未満である。

日本人が通常受ける自然被ばく線量は年平均2・1ミリシーベルト、CTなど医療診断で3・9ミリシーベルトであることと比べれば、上記内部被ばく量が大きくないことが分かる。土壌中濃度が低

いだけでなく、同じ土壌中濃度の地域に住む人の食品からの摂取量が低いのである。

これは、なぜなのか。チェルノブイリでは、汚染情報が隠されていたことも要因の一つだが、自給自足的な経済構造が支配的であったことが大きい。福島では、地産地消の構造はずでなく、かつ非常に早く食品の規制が進んだ。外国の友人に数値

を見せても半信半疑の表情が消えないが、地産地消的な消費構造がなく、市場経済の中に組み込まれていることを説明すると、はじめて納得する。

食品中の放射性物質の規制は、欧米諸国に比べ相当に厳しく、検査も徹底している。米などは30キログラムの全袋検査が行われている。実に1万7千余袋である。この規制も検査も筆者は過剰だと思うのだが、それはお

くとして、これだけ大きな事故が起きた後にもかかわらず、食品からの放射性物質の摂取を徹底的に小さくすることに注力して、日本は成功したと言えるだろう。これは、もっと宣伝していいことだ。こういう状態であるのに国内での理解が意外と進んでいない。俗に、風評被害というのだろう。福島の農作物の買い控えがいまだ続いている。測定結果などの事実を冷静に評価してもらえないことが、非常に残念である。ヨウ素131と小児甲状腺がんについては次回に譲る。